

「過去という壁を越えた村上春樹の小説の主人公」

カレル大学

ユルコヴィチ・トマーシュ

村上春樹の六冊目の、『ダンス、ダンス、ダンス』というタイトルのある長編小説の結末には、「僕」という主人公が夢の中で、高級なホテルの中に隠れてある薄暗い謎めいた部屋の壁に入って、それを向こう側まで越えなければならない場面がある。そこで、主人公が象徴的な形で自分の死を経験して、その後また新しく生まれ変わる。この場面は、『ダンス、ダンス、ダンス』の筋にとってだけではなく、村上春樹のそれまでの全ての長編小説の文脈から見ても、意義深いものである。

村上春樹の長編小説は、一つの文学的な「コーパス」として分析することが可能である。『風の歌を聴け』、『1973年のピンボール』、『羊をめぐる冒険』と、本発表で述べる『ダンス、ダンス、ダンス』の四部作はもちろん、それ以外の長編小説も、処女作が出版された1979年から、現在の2017年までに、主人公の心理的な成長を描写する「教養小説」として解釈することができる。

また、そのような1979年から2017年までの主人公の成長は、いつも、日本の近代と現代歴史に強い関係がある。

小説一冊ずつの物語の筋になる出来事を時間的順序で並べ、事情を細かく分析してみると、村上春樹の小説の主人公が生きている世界は、たとえ1969年の全共闘運動の世界であっても、ほとんどの場合、第二次世界大戦の影響が及び続けている世界である。第二次世界対戦の出来事の名残りが、まるで幽霊のように過去から主人公の生きている世界に現れる。最初の小説には、主人公がそういった成り行きを先ず把握して、その後の小説にて、解決を探す。

『ダンス、ダンス、ダンス』は、村上の主人公が解決を見つけることに成功した最初の長編小説である。冒頭の場面に「愛することが出来ない、誰にも愛されていない」とう状況に置かれている主人公は、自分の生きている国が、象徴的なレベルで、「秘密な、真っ黒い廊下のある高級なホテル」になってしまったことが分かるようになる。その廊下には、途中で、急に「右へ曲がった」ところがあることも分かる。主人公は、その廊下に入り、そこで、自分の生き方を直す必要があることを認識する。その生き方を直すため、主人公が夢の中で彼に助けを求めている、昔知り合った娼婦を探し、また、彼女が殺害されたことが分かったら、彼女の殺人を探さなければならなくなる。その「殺人の探し」という行為は、もちろん象徴的な意味のある比喩である。その「探し」を行って、主人公が同時に日本の過去にある「暗い所」を見つけ、そこに明かりを与えるのである。結局、主人公のこのタスクは成功する。それから、あの「真っ黒い廊下」から、壁を越えて出て行くことにも成功し、愛する、愛されることも出来るようになる。この「真っ黒な廊下」を出るという場面は、村上春樹の小説にとって、一つの大事な変わり目になっている。